



理事長  
岩重 昌勝氏

## 協業組合ユニカラー

<http://www.unicolor.jp/>

本社：鹿児島県日置市伊集院町郡2042-39

TEL:099-813-7213

設立：1974年(昭和49年)

理事長：岩重 昌勝



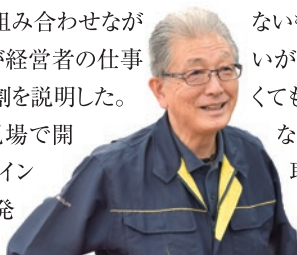
## 価値を見出してくださるお客様へ特殊な印刷を

特殊印刷分野で全国にその名を知られる協業組合ユニカラーは、2000年代初頭まで一般商業印刷を手掛ける印刷会社だった。価格競争に巻き込まれた商業印刷から特殊印刷分野へ転身すべく、2004年に三菱重工製菊全判6色機を導入した。苦労を重ねながら特殊印刷の種類を広げる中で、「新しいもの」を探している顧客の支持を集めていく。2019年に新工場建設と同時に、菊全判6色機 RMGT 1020ST-6 (LED-UV、コーティングユニット搭載)を導入して、次のステップを目指していく。

### 新商品の着想こそトップの仕事

ユニカラーと言えば、多彩な特殊印刷が想起される。「私みずからお客様や関係先に聞いて回り、自治体の会議に呼ばれても、何かないかとレーダーのように探っている。サプライヤーがもたらす技術情報と組み合わせながら、明日の飯のタネを探すのが経営者の仕事だ」と岩重理事長が自らの役割を説明した。

その指示を受けて生産現場で開発を指揮する新常務理事は「インキや資材メーカーと共同開発や改善を繰り返して、いまの



常務理事・製造部長 新 勝彦氏

強みになった。専用レシピを調査してもらったのはじきニスやコーターニスは『UC(ユニカラー)仕様』と呼ばれている」。

同組合ホームページに掲載された数多くの特殊印刷について、「商品化しても評価されないものがあるし、何年か経って引き合いが生まれることもある。商売にならなくても顧客との関係づくりのきっかけになるし、一般印刷や伝票など多様な取引につながることもある。そのためにも印刷見本を定期的につけて、全国の展示会に出品している。

実際に手にとって見ていただくことが大切だ。すると、その先のクライアントに提案できる『新しいもの』を探すお客様が、声を掛けてくださる(岩重理事長)。どう値付けするかが大切だが、それについては「お客様と相談を重ね、商談初期から試作品を作って提案する。こういった相談や試作費、そして特殊印刷にかかるコストを積み上げていくと、どうしても他社より割高になってしまう。恐る恐る見積りを提出すると、お客様の方で価値を見出してくださって、『これでいいよ』と言っていただける(岩重理事長)。



菊全判6色機 RMGT 1020ST-6 (LED-UV、コーティングユニット搭載)



▲バレル交換の効率性を高める紙揃え装置を搭載した給紙部



枚葉印刷課 課長 新山 治氏



◀給紙部のナンバリング装置と組み合わせて品質検査を担う、印刷品質管理システム PQS-D



## 特殊印刷で苦勞の連続

特殊印刷に参入した2000年代初頭を振り返って、岩重理事長は「印刷業界の境界が大きく動き、製版会社や軽印刷業がカラー印



2004年に導入した三菱重工製菊全判6色機 NEWダイヤ306W

刷に参入してきた。ユニカラーはその価格にかなわなかった。だから方針転換した。創立30周年にあたる2004年に特殊印刷に舵を切るべく、三菱重工製菊全判6色機 NEWダイヤ306Wの導入を決断した。

そこから産みの苦しみが始まったという。「それまで油性インキでパッケージを印刷していたことから、UVと油性の特性を併せ持つハイブリッドインキに挑戦した。インキメーカーが少数の印刷テストでうまく行っても、当組合が5,000枚も量産印刷するとうまく刷れない。納めるものがなかったので、封筒や伝票等の印刷でなんとか食いつないだ」(岩重理事長)。

意匠性と段ボールの機能性を併せ持つGフルート段ボール(G段)に挑戦した時も、「用紙の啞え方一つをとってみても相当苦勞した。知り合いの印刷会社ができるなら自分たちができないことはないと考えて、他社に学びに行ったりして、何とか刷れるようになった」(新常務理事)。そんな苦勞の末に当組合が印刷したG段は、それを社内加工したパッケージ会社で『色のブレがない』と大評判になった。「特殊印刷でやっていける自信がついたのは2010年頃だ。306W導入から実に6年かかった」と岩重理事長は当時を思い出す。



緊密に連携して特殊印刷を企画提案する制作、DTP、営業のプロア

## より良いものを少しの人に

「より良いものを少しの人に」というキャッチフレーズは、2004年に特殊印刷に参入した際に打ち出したという。一般商業印刷がメインだった2000年代初頭と比べると、売上が倍増する一方で受注点数が半減して、今では上位10社で売上高の3分の2を占めるという。特殊印刷をきっかけに関係を築いた顧客に対して、主力の菊全判オフセット枚葉機に加えて、フォーム輪転機、デジタル機、A3縦通し機、活版機など、多彩な印刷機による幅広い商品群で、長く太い取引につなげるビジネスモデルだ。



封筒印刷を担うA3縦通し2色機 RYOBI 3302HA(手前)、焼酎の和紙ラベル印刷に今も活躍するドイツ製活版印刷機(奥)



少数の特殊印刷を担うデジタル印刷機



伝票印刷を大量にこなすフォーム輪転機



レンチキュラー、擬似インボスなど、多彩な特殊印刷をお客様に提案する営業ツール

今後注力していく分野について、「鹿児島県でも大手コーピーチェーンが紙製ストローに切り替えるなど、世間が環境に対して厳しい目で見られるようになってきた。今まで化成原反を強化してきたが、世の中の流れに逆行する恐れがある。全国一の竹林面積を誇る鹿児島県からの働き掛けもあって、当組合では2009年から竹素材の紙の開発を続けている。すでにカレンダーを作ったが、より量を使う分野はないかと考えて、竹の紙によるストローに取り組んだ。脱プラの動きに対して、竹のストローを啓蒙して、お客様に提案していきたい。今後は特殊印刷のみならず、特殊なものをつくっていく。『当社はただの印刷会社じゃないんだよ』と打ち出していきたい」と岩重理事長は抱負を語る。

## 先行投資が胆

2019年に新工場を建設した経緯について岩重理事長は「3年前に発生した熊本地震によって建物が崩れる様子を見て、現実を直視した。1976年に竣工した旧工場の耐震診断結果を踏まえて、新工場建設を決断した。将来的には食品、化粧品や薬品メーカーの需要を担える工場を目指しているため、そういう大企業がオーダーした時に、工場監査を含めていつでも対応できるように『背伸び』することにした」。印刷物の動線に配慮した広大なワンフロアの新工場は、粉塵が外部から入らないように、コストをかけて工場内部を正圧に保ち、エアシャワーも設備している。

新工場建設と合わせて、老朽化した2台の菊全4色機と入れ替える形で、菊全判6色機 RMGT 1020ST-6(LED-UV、コーティングユニット搭載)を導入した。薄厚兼用で無理を重ねてきた既設菊全機306Wを厚紙印刷に特化させて、新台は薄物の特殊印刷専用機だ。

「どの胴間にも色間LED-UVを入れられて、ロングデリバリーに搭載したLED-UVと組み合わせて、いろいろな特殊印刷に対応できる。2シフトを敷いて、中には5万通しのロングラン印刷があるので、印刷品質管理システム PQS-D(I+C)による品質検査、濃度追従が貢献している」(新常務理事)。それを結ぶ形で岩重理事長は、「高品質ロングランが九州域内のできるようにしたい。306Wを入れた時もそれに見合う特殊印刷の仕事はなかった。今回もそうだ。先行投資が胆だ」と、将来を見据えた大胆な投資の想いを語った。